

3-04 慢性期の統合失調症者への音楽を用いた介入

○佐々木 慎(OT)¹⁾，嶋川 昌典(OT)²⁾

1)公益財団法人 豊郷病院

2)びわこリハビリテーション専門職大学

Key word：統合失調症，音楽，個人作業療法

【はじめに】統合失調症者は認知機能の低下により，馴染みのある作業を提供することが現実検討のきっかけとなり，対象者にとって有効に働かない場合もある。本報告の目的は，対象者との治療関係を結ぶために筆者が用いた「音楽活動」を報告し，作業療法的な「音楽」の使い方を検討していくことである。尚，発表に際して，対象者に口頭文面での許可を得ている。

【事例紹介】50代の統合失調症の男性(A氏)。現病歴は，成育上の特記事項なく過ごし，大学3年次に恋愛関係の問題から情緒不安定となり，20代前半に初回入院となった。高校教師として就労したが，20代半ばで精神症状悪化し1年の入院。その後，アルバイトをしながら，ギターの弾き語りをしていた。30代半ばに3年間，その後，再燃し4年間の入院となり，徐々に生活リズムも不安定となり，臥床がちとなった。当院には40代半ばから入院し14年が経過していた。家族は高齢の母親のみ。主治医の治療方針は，精神症状は安定しているが，本人が頑なに新たな環境での生活を拒んでいた為，施設内安定となっていた。筆者は5年前から担当している。

【作業療法評価と基本介入】筆者が担当する2年前に病棟での対人トラブルから右大腿骨骨折の痛みが残存していた。病棟生活は，看護師が爪切り，髭剃りを行い，受身的な生活を送っていた。他患者やスタッフとの交流も少なく，時折，レク活動でギターを演奏する場が設けられていた。現病歴や主治医の見解からも能力低下が徐々に起こっており，病棟の保護的な環境も影響を与えていると考えた。A氏の経歴からもプライドが高く自身の思いを他者に理解して貰えないと捉えているように考えた。よってまずは，身体症状に応える介入を基本とし，筆者との関係性が出来てから参加の拡大を促していく方針とした。

【治療介入】

1. 身体機能面へのアプローチ(下肢の他動的ROM訓練)：当初は拒否的で，しぶしぶ無言で訓練に取り組んでいた。音楽やスポーツの話題を提供しても返答は少なく，会話が続かない状況が続いた。介入3ヶ月後，外泊時の支援として座位訓練を実施したのを契機に情緒的な交流がみられるようになった。徐々にビートルズや，筆者の音楽活動を話題にする意欲が見られるようになり，医師への不満，興味のある話題などを語るようになった。また，母が癌で高齢なので，自身の退院は諦めていると話した。筆者のTVやラジオの出演の感想を言うようになってきた。
2. 音楽を使ったアプローチ：筆者との関係性が構築された(1の介入から4年半後)ので，よりA氏の気持ちが表示できるようにA氏が作詞，筆者がRAPで歌うという活動を導入した。それまでのレクでのA氏の作業能力から，ギターが得意と言いながらも，音は外れる，コードが上手く押さえられず不調を訴えるといった面が観察され，単独で演奏をすることは難しいと評価された。よって，A氏が作詞，筆者が歌うという役割であれば，問題が生じてもA氏の能力低下に帰属せずに関わることができ，経験を共有する機会になると考えた為であった。結果，A氏にとっての自己表現ができる機会となり，関係が深まることになった(具体的な歌詞は学会で示す)。

【まとめ】小林(2006)が示すように身体的アプローチを行ったことでA氏の緊張がほぐれ，筆者との関係作りの基盤になったと考える。また，筆者が音楽活動を行っていたこともA氏への関係を作る際に有効に働いていたと考える。今後の課題は，A氏の思いを社会的な活動参加へと広げていくことである。